ユゴーは、六月叛乱にたいするカヴェニャックの野蛮な弾圧を非難する側に、賛成投票している。しかし当の六月二〇日には、かれは国営作業場（アトリエ・ナショノー）にかんする審議にあたって、「王制のもとでは有閑者たちがいたが、共和制のもとではのらくら者たちがいる」という発言を残したのだ。(9) ユゴーには、日常の浅薄な見解や未来についてのお人よしな見解といった反射的なものが、自然や民衆の胎内に形成されつつある生命への深遠な予感とならんで、見いだされる。両者を媒介することに、かれはついに成功しなかった。かれがその媒介の必要も感じなかったことが、かれのライフワークのすごい自負、すごい分量、そして同時代人に及ぼしたすごい影響力の、前提条件だったろう。『レ・ミゼラブル』のなかの「浮浪者の隠語」と題された一章で、かれの資質のあいあらそう両側面は、印象的なまでにくっきりと向かいあう。下層民のことばがつくられる場を思いきって眺めたあとで、この作家はこう結論している。「一七八九年以来、国民はひとり残らず純化された個人となって発展している。人権をもたない、したがって頭上に光がささないような貧民は、存在しない。貧しい者も内部にフランスの光栄を宿している。国民の尊厳が内面の武器だ。自由な者は良心的であり、選挙権をもつ者は統治する」。ヴィクトール・ユゴーが見ていたのは、成功した作家としての経験と輝かしい政治家としての経験が、かれの眼前に呈示したものだった。かれは、自作に集合的な表題をつけた最初の大作家だった――『レ・ミゼラブル』とか、『海の労働者たち』とか。群集とはかれにとって、ほとんど古典古代と同じ意味で、被保護民のむれを――すなわちかれの読者大衆を、選挙民大衆を――意味した。要するにユゴーは、遊民ではまったくなかった。

ユゴーとともに、またユゴーがともに歩んだ群集にとっては、ボードレールはなきにひとしかった。だがかれらは、群集は、ボードレールにとっては実在していた。かれらを眺めることが日日にかれに、かれの不成功の深さを測るきっかけをあたえた。このことが、かれがかれらを眺めてやまなかった理由のうちの、大きなひとつだったろう。絶望的な高慢さが、いわば束になってかれにとりついてきたことには、ヴィクトール・ユゴーの名声があずかっている。もっと激しくかれを刺戟したのは、たぶん、ユゴーの政治的な信仰告白である。それは市民（シトワイヤン）の信仰告白だった。大都市の大衆は、この市民を惑わすことがなかった。かれはかれらのなかに国民という群集を再認し、かれらと合体しようとした。政教分離と進歩と民主主義が、かれがかれらの頭上にふりかざした旗じるしであり、この旗じるしが大衆存在を浄化した。旗じるしの蔭で、個人と群集とを隔てる敷居は見えなくなった。ボードレールのほうは、その敷居にがんばっていた。この点がかれをヴィクトール・ユゴーと区別する。といってもかれもユゴーと同じく、群集というかたちをとって沈澱する社会的な仮象の、本質を見抜きはしなかった。それゆえ、かれがかれらにつきつけた導きのイメージは、ユゴーの群集概念とひとしく無批判的だった。この導きのイメージがヒーローである。ユゴーが大衆を近代叙事詩のヒーローとしてことほぐのと同じときに、ボードレールは、大都市の大衆のなかにヒーローの避難所をもとめる。ユゴーは市民として群集のなかに自己を移し入れ、ボードレールはヒーローとして群集から自己を分離する。

ボードレールは、ゴーティエのようにじぶんの時代に満足してもいなかったし、ルコント・ド・リールのように自己欺瞞に耽って、時代を見て見ぬふりをすることもできなかった。ラマルティーヌやユゴーのように博愛的理想主義をわがものにしてもいなかったし、ヴェルレーヌのように信仰にのがれることも叶わなかった。かれがくりかえし新たな形姿を身につけたのは、どんな確信をももたなかったからだった。遊民、無頼漢、ダンディー、屑屋は、かれにとって、それだけの数の持ち役だった。なぜなら、近代のヒーローはヒーローではなくて、ヒーローの演技者なのだから。ヒロイックな近代とは、こうして見れば、ヒーローの役どころをふくんだ、ひとつの哀悼劇（トラウアーシュピール）である。ボードレール自身がこのことを、ひそかな註記のようにして、かれの詩「七人の老人」の余白で仄めかしている。

ある朝、わびしい街路で
靄のため高さが増してみえる両側の家並みが
水かさの増した川岸と見まがうとき、
そしてまた、俳優の心に似た書割りさながら

汚れた黄色い霧があたり一帯をひたしていたとき、
わたしは主役（ヒーロー）のように筋を強張らせ
はや疲れたわが魂と議論しながら、
重い荷馬車にゆれ動く場末町をたどっていた。

書き割りと俳優とヒーローとが、これらの詩節のなかで一体化して登場していることは、誤解の余地がない。同時代人たちには、このことはいわれるまでもなかった。クールベーはボードレールをえがいたとき、かれが日ごとに変って見えることを、こぼしている。シャンフルーリーは、ボードレールには脱走した漕役囚のように表情をいつわる才能があった、と追想している。またジュール・ヴァレースは、かなりの烟眼をあかしだてているいじわるい追悼文のなかで、ボードレールを大根役者（カボタン）と呼んでいる。

ボードレールの死の数年後、ブランキは陰謀家としてのその経歴の頂点を飾る、記憶にあたいする名人芸をやってのけた。それはヴィクトール・ノワールが殺されたあとのことだった。ブランキは、自己の現有勢力を見渡してみることをのぞんだ。かれが顔を知っているのは、だいたいにおいて、直属の指揮者たちだけだった。かれの兵員のほうがどの程度かれを知っていたかは、わからない。かれは副官のグランジェと連絡をとり、ブランキストの閲兵の段どりをつけさせた。この閲兵はジェフロワにつぎのようにえがかれている。「ブランキは……武装して家を出、姉妹と別れて、シャン・ゼリゼーに位置を占めた。グランジェとの約束で、部隊の――その不可思議な将軍がブランキだった――分列行進はそこで行なわれることになっていた。かれは指揮者たちを知っており、かれらのひとりひとりの背後にそれぞれの兵員が歩調をそろえ、規則的な隊形をとって通りすぎるのを見るはずだった。事は予定どおり運んだ。ブランキは閲兵を済ませたが、この注目すべき見ものに気づいたひとはなかった。老人は、かれ自身と同じように人通りを眺めている群集にまじって、とある木にもたれて立ち、かれの味方が列をなして近づいてくるのを見まもっていた。かれらは、たえず呼びごえによって中断されるささやきをかわしながら、静かに歩んでいた」。――このようなことを可能にした力を、ボードレールの詩も、ことばのなかに保持している。

ボードレールはある機会に、近代のヒーローのイメージを陰謀家のなかにも認めようとしたことがあった。二月〔革命〕の日々に、かれは『公衆の福祉（サリュ・ピュブリック）』紙にこう書いている。「もう悲劇はいらない！ 古代ローマの歴史を終りにしよう！ ぼくたちはこんにち、ブルートゥスよりも偉大ではなかろうか？」 とはいえ、ブルートゥスよりも偉大なんてものではなかった。というのもボードレールは、ナポレオン三世が支配権を握ったとき、かれをカエサルとは見抜けなかったのだから。この点ではブランキが、ボードレールよりも上だった。しかし、ボードレールとブランキの共通点は、相違点よりも深い根をもっている。反抗と焦燥、怒りの力と憎しみの力――それに、両者が分けもっていた無力さも。ボードレールはある名高い一行（訳注7）で、「行為が夢のいもうとではない」世界から、さっさと別れを告げている。かれの夢は、かれが思っていたほどに見棄てられていたわけではない。ブランキの行為は、ボードレールの夢のいもうとだった。両者は絡まりあっていた。ナポレオン三世が六月の戦闘者の希望をその下に埋めこんだ石の上で、絡まりあっている二つの手だった。

ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」『ボードレール新編増補版　ヴァルター・ベンヤミン著作集６』、1975年、晶文社